

台湾の日本語作家・黄霊芝に関する基礎的研究

下 岡 友 加

県立広島大学人間文化学部 准教授

緒 言

本研究の対象者である黄霊芝（1928 -、本名：黄天驥）は台南市に生まれ、日本統治下の台湾で17歳まで日本語教育を受けた作家である。彼は、これまでに俳句、短歌、小説、随筆、評論、童話など幅広いジャンルに渡る日本語作品を書きあげてきた。創立当初（1970）から現在まで四十年以上に渡って台北俳句会の主宰をつとめており、編著に『台北俳句集』全38集（1971～2011）が、単著に『黄霊芝作品集』全21巻（1971～2008）がある。

2004年、黄霊芝は日本で出版された『台湾俳句歳時記』（言叢社、2003）により、第3回正岡子規国際俳句賞を受賞、2006年には「日本文化紹介に寄与した」として旭日小綬章を授与された。日本語のみならず、中国語、フランス語での創作も行い、1970年、日本語文を中国語文に書き直した小説「蟹」で第1回呉濁流文学賞を受賞し、2006年には台湾文学作家牛津奨を受賞している。このように近年、特に高い評価を受ける黄であるが、彼の作品は主として部数の限られた非売品（自費出版）に収められているということもあり、その創作活動の内実に関する基礎的研究は、これまで十分に行われていない。

台湾では、戦前は日本語が強制され（1937年中文使用禁止）、戦後は一転して中国語の使用が義務づけられた（1946年日文使用禁止）。しかし、黄霊芝は国民政府の戒厳令下（1949～1987）では命の危険さえ伴う日本語による創作をあえて選択した。それは政治や国が変わる度に言語を奪われる被植民者の立場からの、そして言語を創作の道具とする作家としての命がけの異議申し立てであった。自国に多くの読者は期待できない、公の発表の場もないという創作者として最大のデメリットと引き替えに、黄は日本語による創作を継続してきたのである。

従来の「日本文学」は、過去の植民地統治によって生まれた黄霊芝のような作家の存在をとりあげることなく、自閉している。戦後の台湾で日本語を使用して創作し続ける黄霊芝の文学行為を検討することは、未だ『日本』一

『日本人』一『日本語』一『日本文学』を一体のものとする観念（小森陽一）¹⁾のなかにある、「日本文学」という制度そのものを根本から揺さぶり、問い直す視座を我々に与える。本研究は、そうした観点から黄霊芝という作家にアプローチするものである。

方 法

本研究は主として下記の2点から実施した。

1. 黄霊芝文学のテーマ、特徴、方法を作品分析から明らかにする

黄霊芝の長年に渡る広範な創作活動のなかでも特に優れた成果である小説三十一編を中心に、短歌・俳句・詩など他ジャンルにも目配りしながら、黄霊芝文学に通底するテーマを明らかにする。また、テーマを支える具体的な方法を実証的につまびらかにする。

2. 黄霊芝本人の発言を記録し、彼の意図や立場を明らかにする

黄霊芝は既に八十歳を越えた高齢であり、病がちではあるものの、幸いにして台北に生存中である。黄自身へのインタビュー調査を通じて、戦後の台湾（特に戒厳令下）で、日本語を使用するということがどのような困難をもたらすものであったのか、実際の体験等を聞き取る。あわせて日本の近代文学作品の受容、影響を受けた作家や作品などについても明らかにする。本人の許可・校閲を得たうえでインタビュー内容を公開し、彼に関する研究の進展に寄与する。

結果と考察

本研究は、次にあげた3点のような調査結果と考察の成果を得た。

1. 小説の具体的方法、並びに黄霊芝文学の特徴

小説「輿論」「仙桃の花」のテーマとそれを支える方法、並びに日本近代作家と比較した際に抽出される黄霊芝文学の特徴を明らかにした。

小説「輿論」は、一つの殺人事件が国家的大問題と化すまでの顛末を語る作品である。小説はただに体制側だけでなく、輿論の形成者である民衆の在り方も批判的に描くことにも成功しており、今日の間人社会にも通底する問題がテーマとして問われている。小説の語りは、事件の真相を末尾まで秘匿して読者を翻弄し、噂に右往左往する民衆と同じ立場に読者を置く。すなわち、こうした仕掛けにより、読者は輿論の罪を身を以て感得することとなるのであり、主題とそれを支える構造、ともに完成度の高い作品と評価できる。(日本台湾学会第13回学術大会、2011年5月28日於早稲田大学にて発表。本研究助成受領前の発表であるが、その後の論文化のための調査に助成金を使用させて頂いた。)

また、小説「仙桃の花」は、おじいさんとおばあさんを主な登場人物とする、一見お伽話風の作品であるが、三十年以上一人の女性を思い続けても報われないおじいさんの姿に、愛の不条理というテーマが体現されている。小説は非情な主題を内包しながら、詩や歌を人物の心理を代弁するものとして多用しており、ロマンチックで詩的な世界を醸成している。それゆえ、読者はおじいさんの悲惨な結末を予測できず、大きな衝撃と余韻を残す作品となっている。「作家は常にベテランでなければならない」という黄靈芝の方法意識が如実に確認できる小説と位置づけられる。(日本台湾学会第9回関西西部会研究大会、2012年1月28日於関西大学にて発表。)

さらに、日本の近代文学を代表する作家である芥川龍之介(1892-1927)と黄靈芝文学を比較考察し、両者の共通点と相違点を考察した。両者の文学に通底する方法としては、緊密に張り巡らされた伏線や繰り返されるどんでん返しの構造、皮肉な人間認識などが抽出できる。一方で両者の大きな差異として、黄靈芝文学には自然という他者を存在感をもって描き出す作品が多く見受けられ、そこに自然の一部としての人間観、人間中心主義を脱する視座が存することを論じた。(台湾日本語文学会第281回例会、2012年4月21日於台湾・大葉大学にて発表。)

2. 黄靈芝自身の発言に基づく彼の方法意識

黄靈芝へのインタビュー内容を記録し、公開した。2011年8月28日、並びに2011年12月10日に台北市の黄靈芝自宅に伺い、インタビューを行った。8月の聞き取り分については、内容を活字化して紀要論文に公表した²⁾。活字化あたっては、12月の会見の際に、黄靈芝に原稿を直接確認してもらい、公開の承諾を得た。これらのインタビューでは、作家は複数の言語や様々なジャンルを使い分けるべきだという黄靈芝の価値観や、発表の場がなかったにもかかわらず創作を行ってきた理由、あるいは熱中する血筋だという自身のルーツに関する情報が証言され、明らかにされた。

3. 黄靈芝の日本語小説集の刊行

黄靈芝の日本語小説三十一編から十編を選び、また黄から書き下ろし原稿(評論)も得て、日本の出版社から小説集を刊行した³⁾。日本の読者の理解のため、注・年譜・解説を付した。この本の刊行により、黄靈芝の小説や文章のレベルの高さを実際に確かめることが容易となり、今後、黄靈芝及び台湾の日本語文学に関する認識や研究の進展が期待される。黄靈芝に関する基礎的文献を一般に広く提供できたと考える。

謝 辞

本研究の遂行にあたり、公益財団法人三島海雲記念財団より学術研究奨励金を賜りました。奨励金によって海外在住の研究対象者との連絡・対面機会を多く設けることが可能となり、より精密な研究・調査を実施することができました。ここに記して、心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) 小森陽一:〈ゆらぎ〉の日本文学、p.16、日本放送出版協会、1998。
- 2) 下岡友加: 県立広島大学人間文化学部紀要、第7号、pp.13-24,2012。
- 3) 黄靈芝著・下岡友加編: 戦後台湾の日本語文学 黄靈芝小説選、溪水社、2012。